

平成27年度 シンポジウム 開催報告

「四国遍路」と「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」との協力協定締結記念

「四国遍路を世界遺産に」国際シンポジウム

- 日時 平成28年2月14日（日） 13:30～16:30
- 場所 サンポート高松 かがわ国際会議場（香川県高松市サンポート2-1）
- 内容 ■基調講演
「世界文化遺産の考え方と巡礼路の顕著で普遍的な価値」
西村 幸夫 氏（東京大学先端科学技術研究センター所長）
- パネルディスカッション
「四国遍路の魅力と世界遺産」
コーディネーター 稲葉信子 氏（筑波大学教授）
パネリスト 西村幸夫 氏（東京大学先端科学技術研究センター所長）
フランシスコ・シングル 氏（スペイン・ガリシア州シャコベオ文化部長）
清水真一 氏（徳島文理大学教授）
辻林 浩 氏（和歌山県世界遺産センター所長）
胡 光 氏（愛媛大学教授）
- 組織 主催 「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会
協力 NPO 法人遍路とおもてなしのネットワーク、香川県議会日欧親善議員連盟

■ 概要

「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会は、平成28年2月14日（日）、香川県高松市のサンポート高松かがわ国際会議場において、世界遺産登録に向けた初の国際シンポジウム「四国遍路を世界遺産に」を開催した。前年の9月、世界遺産の巡礼路があるスペイン・ガリシア州と四国4県が協力協定を締結したことを記念して開催したもので、当日は約160人が参加した。



スペインの信仰の道「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」や国内の世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に関する研究者のほか、世界遺産の専門家などを招き、これらの資産の考え方や取組みをふまえ、比較をしながら四国遍路の特質や世界遺産登録に必要な「顕著な普遍的価値」について活発に意見交換が行われた。海外からの視点を交え、四国が一丸となって取り組む四国遍路の世界遺産登録推進事業について、改めて理解を深めていただく機会となった。

■ 関係者挨拶



「四国八十八箇所霊場と遍路道」
世界遺産登録推進協議会会長
千葉昭 (四国経済連合会会長)

冒頭で、本協議会の千葉昭会長は、民衆の中で育まれてきた四国の宝、四国遍路を世界に向けて発信し、未来に引き継ぐため、四国一体となって取り組んでいることを紹介。ガリシア州との協力協定締結により、世界遺産登録に向けて心強い味方を得たとして、「本シンポジウムが世界遺産化に向けた大きな一歩となり、ガリシア州、スペイン国と四国の絆がより強いものとなることを祈念する」と挨拶した。

続く来賓挨拶では、ゴンサロ・デ・ベニート駐日スペイン特命全権大使が、「サンティアゴ・デ・コンポステーラと四国遍路には歴史的な起源にも共通点があり、現代もスペインと日本の友情、交流は日々深まっている」と挨拶し、文化庁文化財部記念物課の加藤弘樹課長は、「文化庁としても、引き続き出来得る限りの支援を行っていききたい」と述べた。また、香川県議会の辻村修議長は、世界遺産登録に向けてはまだ多くの課題があるとし、「本日のシンポジウムの成果に大いに期待している」と挨拶した。

閉会に当たり、開催県である香川県の浜田恵造知事は、活発な議論が交わされた有意義なシンポジウムであり、改めて世界遺産登録への手ごたえを感じることが出来たと謝辞を述べるとともに、「四国遍路の世界遺産登録に向けて、四国全体でなお一層盛り上げていくことが重要」として、参加者に理解と協力を呼びかけた。



「四国八十八箇所霊場と遍路道」
世界遺産登録推進協議会副会長
浜田恵造 (香川県知事)

■ 基調報告

「世界文化遺産の考え方と巡礼道の顕著で普遍的な価値」

本協議会の「顕著な普遍的価値の証明」検討会委員でもある東京大学先端科学技術研究センターの西村幸夫所長から、世界文化遺産と最近の情勢、巡礼路や文化の道の考え方について講演いただいた。

世界遺産条約の締結以前にも武力紛争時に文化財保護をする国際条約はあったが、大きな契機となったのはエジプトのアスワン・ハイ・ダム建設。水没する神殿を世界中が協力して救ったことが世界遺産の発想に繋がり、戦争がない平時における初めての枠組みとして世界遺産条約が成立した。

近年では、荘厳な教会などだけではなく、棚田や鉄道、近代都市、近代建築など今まで世界遺産としてあまり評価されていなかったものに種類を広げる動きがあり、「世界の宝を破壊から守るところから一歩進み、世界の文化を認め合って大切にするために多様性を受け入れるというところに議論が広がってきている」という。

巡礼の道の「顕著な普遍的価値」について考えると、世界遺産ではサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路、紀伊山地の信仰の道、メキシコの銀の道、シルクロードの道などがあり、「信仰の道であっても、文化がつながり影響しあう道であるところが大きな共通点」という。線としての道と点としての施設があるが、形のない信仰等をどう表現するかは難しく、「さまざまな信仰をうまく物語にして顕著で普遍的な価値を描き出さなければならないし、各構成要素がそれにどう寄与するかを明示する必要がある



東京大学先端科学技術研究センター所長 西村幸夫氏

る」として、この点をしっかり検討することの重要性を強調した。紀伊山地の参詣道では自然の中を歩くことで身を清められ、イタリアのモンテ・サクリでは点在する祠を巡ると壁画等からキリスト教の教えがわかる仕掛けがある。同じ巡礼でも多様性があるので、「遍路道についても他の信仰の道と比べてこんなにユニークだと説明し、具体的なものでうまく表現できるとよいのではないか」と語った。

最後に、富士山の環境改善に向けた取組みに触れ、「世界遺産を目指すいろいろな努力が、具体的に風景を良くしていくことにつながっていくということも同時に重要」として、今後の四国の取組みにおいて並行して持つべき視点について提言いただいた。

■ パネルディスカッション 「四国遍路の魅力と世界遺産」



左から、コーディネーターの稲葉信子氏、パネリストの西村幸夫氏、フランシスコ・シングル氏、清水真一氏、辻林浩氏、胡光氏

最初に、テーマに沿ってパネリスト各氏からコメントをいただいた。

サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路について研究するフランシスコ・シングル氏は、同巡礼路と四国遍路の道には多くの共通点があるとして、教会建築と同じように札所寺院の建築様式も重要なものと主張すべきであり、そのうえで、「四国遍路が日本全体の中で重要な文化の背骨になっていることを強調することが重要」と語った。

続いて、愛媛大学の胡光教授は、僧の修行から庶民の巡礼へと変化した四国遍路の歴史を紹介。庶民が庶民のために作った周遊型の巡礼を、四国の人々のお接待が支えてきたと説明し、「その根底には、四国の自然の中で育まれた弘法大師信仰があり、それを信じる人々の再生の物語がある」と特徴づけた。

徳島文理大学の清水真一教授は、遍路道沿いの茶堂や大師堂、門前町なども物証になるとし、保護すべき資産の時代を、歩き遍路が主流で、伝統的景観が保たれ、自然との調和が保たれ、お接待が脈々と生きていた時代と考えると、「昭和初期頃までは江戸時代からさほど変わっていなかったのではないかと近代も評価する必要性を説いた。また、今後の取組みの参考として、関係者が学術的な議論、研究を続けながら追加登録を目指している平泉の活動を紹介した。

和歌山県世界遺産センターの辻林浩所長は、世界遺産登録までの経緯を説明し、取組段階での3県の連携の重要性を強調した。登録当時、資産の中心となる道の多くはほとんど使われず傷んでいたが、それを守っていくためにボランティア型の一般参加による道普請の仕組みを作り、活動を続けていることを紹介し、「世界遺産の保存のために、一緒に地域文化も遺していく方法を考えていきたい」と語った。

これらの意見に基づいて、円環する巡礼の形式、今も生きている巡礼やお接待、四国の自然との関わりなどについて意見が交わされ、それらを遺された「物」で表す必要性が改めて確認された。西村幸夫所長は、紀伊山地の参詣道の例に触れ、人が作った道標など道にいろいろな思いや痕跡があり、それが

繋がって祈りの道が形としてわかってきたことから、遍路道についても「祈りや救済ということが、そのようなもので表現できるのではないか」と語った。

コーディネーターの稲葉信子筑波大学教授は、これらの論議をふまえ、今後の四国の取組みについて「大事なのは、地元で歴史を掘り起こし、しっかり調査して本物に基づいた価値を見付け、ストーリーを紡いでいくこと」と提言し、世界遺産登録のためには、「価値を見つけること」と「保全の措置をとること」の二つが両輪として必要であり、関係自治体が連携して調査等続けることが重要と総括した。